

一番目に産まれた乳飲み子金三郎を抱えて菊が倒れた時、一茶は湯田中温泉に入り浸り、ほとんど家に帰らなかった。妻が重症になってからようやく看病している。一茶は生半可に薬の知識があるので、自己流の治療をして、ほとんど医者の方診察を受けさせていない。

妻の病状が悪化すると、子を他人に預け、妻を妻の実家におしつけてしまう。妻が危篤になっても遠く離れた丸子に出かけてしまい、妻が死ぬ前日の夜中、妻の実家に戻ってきた。門人の妻が死んだときに、二首の和歌を詠んで、その死を弔った一茶は、迷惑をかけた菊にはいたわる句も、弔う文も残していない。弟子たちが「一茶先生女房追善句会」を催したときも、妻を偲んだと思われる句を残さなかったという。

著者は「あれだけ子供たちの死に際しては慟哭し、断腸の思いを吐いた一茶であるのに、この仕打ちはどうしたものか。十年間連れ添い、一茶のために尽くし、ついに犠牲となった伴侶に対して自分勝手、あまりに薄情、冷淡ではないか。ただ子を産まず道具としてしか見ていないのではないかと、思いがする」と憤っている。

「一茶の俳人としての文学的功績を讃えるものは、同時にその影に埋もれた菊の犠牲的生涯に哀悼の涙を注がなければならぬ」と一面的な一茶研究に対する著者の批判は、蒙を啓かされる指摘と同時に、一八〇年後に捧げられた菊への哀悼の辞である。

(蔵方 宏昌)

〔東山書房、京都府京都市中京区西ノ京小堀池町八一二、電話〇七五一八四一一九二七八、二〇〇二年五月九日、B六判、三二〇頁、本体価格二〇〇〇円〕

藤田恒夫・牛木辰男 著

『カラー版・細胞紳士録』

この本は、新書版には珍しい多色刷りの現代細胞学の案内書である。一九五〇年代に筆者は、臨床医学教室から病理学教室へ数年留学した経験をもつが、その頃から五十年経た細胞学の進歩が本著作によって眼からウロコが落ちるように示されて有意義である。

まず目次をみると、はじめに、多様で多才な細胞たち」というタイトルで総論が述べられている。総論と書かないところに、この本の筆者たちのユニークさを感じる。

第一章とは書かない、「人体ビルの建築士」の章には、1.糸を吐く怪鳥・線維芽細胞、2.レース編みの名人・脂肪細胞、3.水のクツション・軟骨細胞、4.壁の中の活動家・骨細胞、5.よだれを垂らす巨象・破骨細胞、6.宝石づくりの魔術師・エナメル芽細胞、7.赤信号はみのがさない・象牙芽細胞、8.柔軟にスクラムを組む・水晶体の細胞、が紹介されている。この項目タイトルをみただけでどれから読もうかという面白さである。このスタイルが講義の中にもちこまれているなら、学生は幸せである。筆者の学生時代は理

屈抜きの暗記の学問であったと思うからである。

この本の内容は山之内製薬の月刊PR誌「新薬と臨床」に連載されたもので、一九九〇年を中心に前後六年半かかっている。当時、開業医であった筆者は、毎月毎月「細胞紳士録」を読むのが楽しく、次号が来るのが待ちどおしく、切りとってスクラップ帳に加えたぐらいである。PR誌であるのでアート紙を用いているから美しいカラー版であったが、新書に入って紙と色はどうなるのかと思った。アートではないが、特別の紙を用いてカラー判にしている。図三(第六頁)の、電顕で明らかにした細胞の基本構造は、灰色、橙赤色、黄色、紫色、青緑色、黒色の七色刷りで示される。この図は牛木辰男氏のスケッチにもとづく略図であるが、解説文の方を見てみよう。核はDNAの格納庫である。核の中には核小体とクロマチン(染色質)が区別できる。この区別は筆者も教わった気がする。何しろ日本に電顕が何台もなかった時代だから明確な記憶はない。

続いての解説は、クロマチンはDNAが特別のたんぱく質(ヒストンなど)と結びついてできたひもの集まりで、DNAの転写はこのひもの一部をほどこきながら進められる”となつて、読者の頭の中は、核内の紫色の粒々がクロマチンで核酸に関連していると整理できる。著者らは、ここ十年近くの間の学問の進歩を取り入れ、PR雑誌での記述を大改訂したと”あとがき”に書いておられる。全く有難いことで、最新の細胞学をこんな形で学べるとは夢にも思わなかった。ぜひこ一

読下さい。

最後に一つのエピソードを書いておきたい。筆者が卒業する一年前、私共に脳の解剖学を教授された伊東俊夫先生は群馬大学に移籍された。従って先生がどんな研究をされ、どんな業績をあげられたかを知らなかった。ところが、雑誌の「細胞紳士録」に「ひらひらのドレス・肝臓の伊東細胞」がのつて、筆者は伊東先生の仕事をおそまきながら初めて知ったのであった。こう書かれている。

「肝細胞と毛細血管(類洞)のあいだには、ドイツセ腔というすきまがある。脂肪摂取細胞(染料のオスミウム酸で黒染する脂肪滴をもつ細胞)はこのすきまにあつた。(一九五〇年の発表)類洞内に棲む、異物を食べこむクッパー細胞(常駐型マクロファージの一種)とは、明らかに別の位置にある。クッパー細胞は類洞内にあり、「伊東細胞」は類洞外にある。そして後者はビタミンAを摂取・貯蔵する特性がその後の研究でわかつた。それでも名称に反対する人がいるが「伊東細胞」の名はそのまま残すべきだと思ふ。

伊東細胞は肝小葉内でコラーゲン線維を産生する唯一の細胞で、豆腐のように軟らかい肝臓が形を保っているのはこの細胞のおかげである。肝硬変にさいしては、この細胞がつくつたコラーゲン線維が肝小葉を埋めつくす。

伊東細胞の紹介が長くなつたが、走査電顕でみると、この細胞は複雑に分岐するひらひらの突起をドイツセ腔内に伸ばしているが、その役割は未だ不明だといふ。

医史学的には、クッパーが銀染色して観察した類洞内外の食細胞について、何時の間にか内外を交換した記載ミスは面白いが、日本人の新発見は五〇年の後でも命名権にクレームがつくことは大きな問題と思つた次第である。用語索引がついて大変便利。

(中西 淳朗)

〔KK岩波書店、東京都千代田区一ツ橋二一五―五、電話〇三一五二二〇―四〇五四、二〇〇四年三月、本文二二七頁、本体一〇〇〇円〕

片桐 一男 編

『日蘭交流史 その人・物・情報』

平成一二年はオランダ船リーフデ号が白杵に漂着してから「日蘭交流四〇〇年」に当たる年であった。本書の編者片桐一男氏によれば、この記念すべき年に際して、日蘭学会の「日蘭交流四〇〇年の歴史と展望」を除き、日蘭交流の歴史を概観するような書籍の刊行はほとんどみられなかったという。

もともと平成一二年一〇月二―二三日東京大学山上会館で開かれた洋学史学会主催の日蘭交流四〇〇年記念シンポジウム「江戸時代の日本とオランダ」は、配布抄録集こそ七〇頁にすぎなかったが、内容は質の高い報告が日蘭双方の二五名の研究者によって行われた。その後平成一三年三月フルペー

パーの日本語版一九二頁が出されている。

本書は五〇九頁の本文と、付録として年表、日蘭交流史関係文献一覧、あとがき、各論文の抄録及び序の英文、目次の英文五四頁を含む堂々たる大冊である。本書刊行の目的は、日蘭交流史研究上の最新重要基本文献ということである。

本書を通覧すれば、正にそれが実感される。即ち二四人の気鋭の研究者が、その蘊蓄を傾けて書き上げた力作揃いであり、これら諸論文は編集者によって I. 人の交流と蘭学、II. 書物と人、III. 欧文資料・画像資料、IV. 近世の長崎貿易、V. 情報活動、VI. 洋学の近代の六章に分類・整理され、これらを束ねる言葉として、表題の副題である「人・物・情報」が登場する訳である。

特に評者が共感をもつたのは、俗に多用される言葉「ヒト・カネ・モノ」の金の代わりに、情報という語をもってきたことである。江戸時代に始まった蘭学は、鎖国時代という与えられた条件にあつて、今いう所の海外情報の収集という宿命の性格を負わされたといえよう。最近注目されて研究され、本書でも取り上げられている「風説書」という表現は、これをいみじくも示しているように思われる。

本書の執筆者は殆ど片桐会長主宰する洋学史研究会会員であり、一九八三年発足の同会創立二〇周年事業として企画され、また本書の刊行は結果的に片桐教授の青山学院大学定年退職記念論文集にもなったようである。

次に順序としては内容―各論文についてのコメントという